蟻土に蹋まつて、米軍の蹂躙に任すの外、手段はあるまい。

帝國の滅亡とは、徒らに誇張した、恐怖想像ではなかつた。

惟神團神扉を開いて祈禱の大秘法を修す

昔者、モーゼすらも、大奇蹟を現はした、軍勢を率ひし暴王に逐はれた渠は、巖頭に起ちて、必死の祈禱を捧げた、天は渠の正義に與せしか、倏ちに海水は二つに分れて、干潟となつた、渠は易々と遁れ去つた、逐ひ掛けて干潟を渡らんとする、七千の軍勢は、堰き反す怒濤の爲めに、暴王と與に溺れたのであつた。

神、天地開闢の創めに產靈ばれし誓の證左は、大神業開始に方つて、彼れ惟神の團體に賦へられてあつた、天地の大眞理を超絶して、其事の正邪をも問はず、八十神奮起して、祈願の貫徹に、神力の限りを竭さるゝ、大秘法である。

大本營より、敵機見ゆとの報告を、傳達された彼の團體は、萬一を慮り、信徒の重なる者迄も會はしめ、神扉を開き、最も壯嚴なる、戰捷祈願大秘法を修したのであつた、夫の天地の眞理を超絶して、八十神を振ひ起たしむる、大修法の竟つた時は、恰も、大阪市の上空に襲來せし、米飛行機より、第二彈を投下されし時であつたらう。

朝野を擧げて、愕然色を失ひ、大混亂に陷れる今の時、惟り肅かに天空を仰いで、刻の移るを待つものは、彼の團體である。

❀

水平動に等しき震動は、轟然たる響きと與に、萬象を撼はしたが、それも瞬時にして止んだ、氣温は俄かに上昇して來た、天空を仰げば、かの二月五日に等しき、凄愴を極むる、奇觀を呈してゐる、是れは上空に於て、空氣の稀薄なる、層中の炭素分子が、電子の强烈なる衝突に因つて生ずる、電火の爲めに、燃燒するのである、地球上は、悉く彼の時の、天體變化に等しき、狀態を來したのだ、再び電波異狀の爲めに、

通信が杜絶してあつたから、當局者も、國民も徒らに、焦慮と憂懼とに、鎖されてあつたが、時計が七時を指す時は、夕立の霽れた、後程のことも無く、天體の奇現象はけろりと回復した。

神の大威力顯現敵機盡く自爆す

各所の無線電信所より、滅茶苦茶に送電報告し來る、錯綜せし電波を、綜合解釋して見ると、次の樣な報告となる。

無數の米飛行機は、浮塵子の如く、大阪市の上空に襲來した敵機は、數彈を投下して、將に大阪市を、一擊の下に爆破せんとするの刹那、轟然たる大音響と與に、天地震動して、電力を始め、總ての機關が停止した、同時に、大阪市の上空は、殆んど、猛火に包まれたる如き景を呈し、非常の熱氣を感じて來たが、地上の物體には、何の異狀も無く、火雲に包まれた上空に、相次いで起る爆音は、米軍の飛機が、空中に於て、皆な自爆せし、爆音であつたのだ。

種々の形狀を爲せし、異樣の物體が、地上と言はず、屋上と言はず、雨の如く降下したのは、空中に於て、自爆した、敵機の破片であつた。

此開闢以來の、神變奇怪の事は、殆んど、瞬間の出來事である、全市民は、恐怖、歡喜、感激の極點に達して、呆然自失の態となり、萬歲と、歡呼を發する者だにない。

彼等は、斯る神力によりて、奇捷を博し、死地より、眞に蘇生せし事を、未だ自覺せざるに由るならん。

大祈願は、偉功を奏して、神の大威力は顯現した、心臟に痲痺を起さん計りの、大壓迫を覺え、頭腦を鐵鎚(ハンマー)にて打ち碎かれし如くに感じたのは、內閣諸公、軍事最高幹部連のみではない。

何故か、國民は、熱狂的歡喜を起さない、それは神力の偉烈に、大恐怖を起したか

らである、國民性の通癖なる、歡喜熱狂を起さぬこそ、國家は幸ひである。

然し戰局の前途は、未だ遼遠であると謂はねばならぬ。

敵の同盟國倫敦に協議會を開く

此所は英國倫敦の、ホワイトホールに於ける、內閣事務局である、英首相は、主催者として、議長格に構へ、加奈陀首相、米國よりの特派大使、支那大使、濠州首相、其他閣員、殖民地首相總督、悉く列席して、協議會を開いたのである。

此の會議こそは、常に先見の明を誇つてゐる、英首相が、米國飛行遠征隊が、日本の大奇蹟の爲めに、敗滅せしを見て、早くも大勢を察し、此際米國は、大戰敗と云ふ終局に至らぬ前に、和を講じ、他日を待つて、捲土重來するに若かず、米國を除く其他の國は、急遽嚴正中立を宣言せよと云ふ、講和勸告會議である。

米大使の論は、意外に率直であつた、實力を過信する米國民は、現下の戰況にてはまだ懲りない、今本國政府が、猝かに講和を唱道せんか、擧國一致の下に雌伏する、反對黨が勃興して、內訌を來し、統一を失ひ、却つて內治上に破るゝことゝなる、故に時機尙早であると斷言した。

東亞の前途を略ぼ推察した、老獪なる英首相の腹の中は、其時機尙早こそ望ましい所である、彼は片務的であつた、日本國民の最も嫌忌せし、舊い同盟を、因緣に擔いで、逸早く日本と握手せんとする魂膽である。

濠洲首相ムリードは、猛然起つて、大反對論を吐き、我が濠洲は國力を傾けて、米國を援助せん、此際、世界を侵略統一せんとする、日本を壓迫せざれば、何時の代に至るも、黃禍は絕へぬであらう、米國政府は、飽く迄戰爭を繼續するこそ當然である英國首相の提議は、世界の大勢に逆行すると、明言した、講和相談會は、大討論會に化して了つた、濠洲首相の暴論に雷同して、加奈陀首相も、我が國は米國政府が、戰爭を繼續するに於ては、國力を擧げて援助すると、聲明した。

甲是乙非、議論沸騰、協議會は有耶無耶に終つた、英首相の腹藝は、筋書きが足らぬ爲め、演劇とはならずに、舞臺を閉ぢたと言ふべきである。

此情報に接した、帝國の外務當局者は、英國が、聯盟各國の大壓迫に堪へやらで、朝野を擧げて今や大動搖を來しつゝあるのだといふことが分かり、對歐洲外交に於ける、方策の好材料を得たことを喜んだ。

未だ軍備の充實してゐる、傲慢不遜の米國は、濠洲加奈陀兩國の聲援に、一層勇氣を增して、更に大復讐戰に出づべきことは、當然の事實として、帝國は覺悟しなければならぬ。

我が領海は全く敵艦隊の跳梁に委す

突如として米艦隊が、根室港を砲擊したのは、例の牽制手段であつた、輸送護衛任務の第二艦隊が、日本海の波浪を蹴つて、全速力にて津輕海峽を通過した頃は、既に

北海沿岸には、敵艦の片影だも無かつた、日本海軍の偵察飛行隊の、視界を遁れた米艦隊は、小笠原島を假泊所として、大小五十餘隻より成る濠洲艦隊と合し、一隊は富津岬より、觀音崎要塞に亘りて、遠距離砲擊を加へ、分れた一隊は、九州東海岸一帶に亘る無防禦地を、遠距離砲擊を加へることに、戰略を調へ、威風堂々、海上を壓して押し寄せた。

聯合艦隊全滅後の我が海軍は、殘餘の舊式巡洋艦、小驅逐艦にて、漸く本土と、奪還せし臺灣と、占領後少數の守備隊を置く比島との間の、聯絡を保つて、此の菱形線上の警備に、服して居るのに過ぎないのである。

今や、大艦隊の襲擊に際して、之れを防戰驅逐すべく、配置を離るゝことは、神命を以て堅く禁じられてある、我が各要塞の備砲と、敵艦砲の有功着彈距離に、八基米乃至十基米の差があるのだから、我が各要塞は、米艦隊の眼から見ては、箱庭の置物程にも感じない、我が軍は來襲敵艦隊に、多少にても防戰抵抗の見込あるものは、海

軍航空隊の幼稚なる、少數水上飛行機に過ぎないのである。

己に富津岬の砲撃は、開始されたと云ふ無電は、頻々として軍令部に受信さるゝ、一方背面を顧みれば、重要なる本土朝鮮間の聯絡警備と、唯だ一條の動脈とも言ふべき、支那よりの、物資輸送の護衛を乘てゝ、第二艦隊は、大平洋に出づるの已むなに至つた。

一難去つて又一難は、軍國の恒とは言ひ乍ら、帝國も今は、大飛行隊襲來の際にも增したる、危急に陷つて了つた、折柄。竹敷無線電信所と、濟州島無線電信所より、朝野を震駭せしむべき、恐ろしき無電報告が放送されて來た。

南下した敵艦隊は、種子島を左舷に見て、大隅の一角、内之浦灣に大砲撃を加へ、灣港を撃破し勢に乘じて、艦首を回らし、日向灘の激浪を物ともせず、油津港一帶に砲火を集注して、殆んど、舊態を存せぬ程の猛撃を加へた、更に餘勢を以て、長驅、宮崎を砲撃する頃は、無人の境を行くが如き、暴威を逞うしたのである。

東京灣方面に至りては、富津一帶の要塞地帶は、殆んど、元形を留めざる慘狀である、觀音崎砲臺は、僅かに半時間にて、沈默せしめられた、落下する敵の巨彈の爲めに、數個の御臺場が、影を沒したのは、取拂ひ工事費を省いてくれた、難有からぬ親切とでも謂ふべき歟……。

敵艦艇のために蒙る日本海上の大慘害

砲撃の慘狀にも增して、海軍當局者にも、國民にも色を失はしめた、其凶電こそは長時間遠距離航行に堪へる、米海軍潛航艦隊は、遠くカムラン灣附近の、一島嶼に根據を占め、彌〻兇暴なる威力を發揮した。

彼れは、二個軍團の第二軍を滿載した、我が十七隻の輸送船を、黃海外洋上に發見して、一瞬間に撃沈し、直ちに朝鮮水道を北上した、時恰も、浦鹽斯德を出港して、我が敦賀に向ふべく、僅かに五十浬を進みたる、日本海上に於て、遂に米潛航艦隊に

出會した、三十三隻の輸送船は、是れも亦た四十分にして、盡く海底に沒した、漸くにして一隻の燃料搭載船が、死力を竭して、虎口を遁れ來たのである。

此の擊沈された、三十三隻の巨船が、滿載した物資こそは、食料品にあらず、銃器被服にあらず、眞に帝國の死活を制する程の、重要軍需品、卽ち獨佛の各專門家が、死力を竭して研究の結果、急に發明完成した、航空界のあらゆる理想を完備せ、新式戰鬪機千五百臺、一食能く一週間の、活動體力を持續することを得る、補助食料、飛行機上より空中に撒布して、忽ちに空中電波を消滅せしめ得る、液狀瓦斯、是れ等は皆な優に、米國現在の、機械的戰鬪力を擊退するに足る、貴重材料であつた。

各〻熱誠を籠めた、寄贈國の失望憤慨も、亦た想像の外であらう。

其れにしても、八個部隊に分轄した、我が優勢なる潜航艇隊は、何事を爲しつゝあるかとは、何人の胸裡にも浮ばねばならぬ疑問である。

少しく、隱れたる今迄の、彼等の功績を語らう。

我が潜航艇英艦隊を新港に封鎖す

小問題として、忘れてゐたのではない、相踵いで襲ひ來る、大問題の爲めに、國民は忙殺されてゐたと言はねばならぬ、決死の將卒が乘組みだる、我が潜航艦艇は、快速力の小型潜航艇を、沿岸防備の爲め、僅かに遺して、大英斷を以て生還を期せず、非常なる大冒險を敢行した。

天祐は勇士に厚く、千歲不磨の功績を擧げたのである、それは、全艇隊皆な南洋に出動して、佛領安南の某港を根據地として、鬼神の如き活動を續け、新嘉坡附近の危險を冒して、淺水潜航を爲し、斯くして、英艦の進出を完全に阻止し、英國東洋艦隊の影を、洋上に留めざるに至らしめた。

英國東洋艦隊の優勢を以て、支那艦隊に合し、帝國沿岸襲擊の、共同動作に出なかつたといふことが、漸く解つたであらう。

斯る沈勇機敏の潛航艇隊が、能く支那外洋より、日本海に亘りて活動してゐたならば、米國潛航艇隊をして、斯くも、暴威を逞うせしむるには、至らなかつたであらう。

畏くも勅使を惟神團體に差遣はさる

かの郊外の神屋に、畏くも猝かに、勅使を差遣はされた、それは今や、帝國軍需品の倉庫とも言ふべき、支那大陸には、一兵も止めず、海上は、本土朝鮮支那間の交通を、完全に遮斷され、兵器材料の上に於て、最後の望みを屬したる、同盟各國よりの寄贈品は、日本海底の藻屑と化し、太平洋沿岸は、殆んど無抵抗の有樣にて、間斷なく、敵の砲火を浴び、金甌無缺の皇國は、將に幾千億の巨資を抱いて、滅亡に瀕せる窮狀は、神慮の程測り難く、其れを質さんが爲めなのであつた。

恐みて勅使を迎へた、神屋にては、裝束を更めて、神司長が、勅使に會見せんとする利那。

上空に雷鳴の如き、大音響を感ずると與に、上下動の强震に等しい、急激なる大震動を來した、又しても天體の怪象か、大地震の襲來か、前年來屢〻强震に襲はるゝ爲め、恐怖病に罹れる如き、滿都の士女は、それ大地震襲來と計り、色を失つて屋外に飛び出した、而もそれは瞬間——少しも震幅を有せざる、突發的の地動に過ぎなかつた、家屋器物には何等の被害もなく、時計の振子が停止したに過ぎない、例の小賢しき、自稱地震學者共は、地震學上前例なきが故に、地震にあらずとでも言ふべきか、誰人も、呆然として奇異の感に囚はれた。

宮中の御模樣を打ち案じ、倉皇として、辭去せんとする、侍從を靜かに押し止めた神司長は嚴かなる口調で。

『是れこそ大神威事、本州に震源地などを有する、近距離の地震ではありませぬ、何れも安全であるべき筈、時を移さず、總て判明致しませうが、これは豫て、大神が御

仕組ありし、皇國の最後の救護に下し賜ふ、絶大なる神力の顯現と信じまする、報導を待つまでもなく、彼の米大陸が、大地震に襲はれたものに相違ありません、貴官の今日の御使命も、是れに依りて、萬事解決するものと存じます、惟ふに、今日迄の行程に於て、勝敗相混じ、徒らに人智を以て、推し測ることの出來ぬ、國運推歩の方途に惑ふ程の狀態であつたといふことは、重大なる任務を負ふ、皇國に對し、非常なる意義のある試錬を、神が下し給ふたものであります、恐れ乍ら、斯く御復奏を給はり度く、敬んで希望致しまする。』

と、回答した、勅使は旨を體して、急ぎ辭去したのであつた。

米大陸に大地震襲來の報到る

大本營所在地の、放電所は、幾かに一部分の改修によつて、世界一の無電受信局とはなつた。

突如、大本營の受信機は、驚くべき送電を受信した。

羅馬より第一報――。

里昂より第二報――。

墨西哥より第三報――。

何れも只だ。

▼米大陸に、大地震襲來し、大海嘯之に次ぐ、被害程度未詳。▲

と、あつた、舊は善隣、今は仇敵なる、米國の大震災と聞いて、全國民は、何とも言へぬ、竦然たる難有さを感じて、思はず天を仰いで、歡呼の聲を揚げた。

遮莫（さもあらばあれ）、寸刻も早く、聞かまほしきは、敵國震災の被害の程度である。

急遽背進の敵艇隊我潛航艇のために全滅さる

さしも、英艦隊をして、多年研ぎ澄した爪牙を、東洋否な、日本沿岸に抓（か）くること

能はざらしめた、我が潜航艇隊は、彼の潢汪なる南洋々上に、縱横の活躍を續けて居た折柄、兇暴なる米潜航艇隊が、我が根據地の直ぐ背後に潜んで、帝國の領海に出沒し、猛威を振つて、輸送線を遮斷するに至つて、頻發せし慘事を知つた、南洋出動の我が潜航艇隊は、其激怒頂點に達して、南洋の關門鎖鑰を、僅かに遺せし、大小二十隻の潜航艇に委した儘、全艦艇は、必死の全速力を出して、自國の領海に背進して來た。

折柄、さんざん日本海に暴威を振つてゐた、米潜航艦艇が、一齊に太平洋に出づべく、對馬水道に差掛つて來た、此に端無くも急遽歸還した、我が潜航艇隊と、大衝突を起したのである、現時の潜航艇が有する、機械能力の最大限を超越せし、幾んど無謀に近い働きを以て、我が潜航艇は　大小總數僅かに百四十六隻を以て、激鬪四時間に亘り、さしも猛威を振ひし二百七十隻の、米潜航艇を、一隻殘さず擊沈したのである、是れが以前の海戰であつたならば、如何に豪快なる壯觀を現じたであらうか、斯くも壯烈無比なる大活動が、只だ海上に爆破の水柱を立て、轟沈する際に、大なる渦紋を描いたに過ぎなかつた。

海戰以來、我が潜航艇隊の働きこそは、實に帝國海軍戰史上に、類ひなき大功績を遺したのである。

敵艦序列を亂して背進、支那休戰を申込む

巨人が無人の境を、横行濶歩する如き、暴威を縱まゝに振ふてゐた、米國潜航艦艇が、急遽全隊を纒めて、太平洋に進出せんとしたのは、そも何故ぞ、太平洋に面せる帝國の、防備なき各沿岸に出沒して、絶へず威嚇的砲擊を續けてゐた、敵艦隊は、一齊に攻擊動作を停止した。

我が海軍偵察飛行機の、無電報告によれば、敵艦隊全部は、遽かに艦隊序列を亂して、東に向つて背進を開始したといふことである。

臺灣に根據を占めた、我が航空部隊の、適ま飛行機襲撃を行ふに過ぎない、而も彼の地に一兵も留めざる、我が日本に對して、支那が猝かに、休戰を申込んで來た。

刻々に危機の切迫しつゝあつた、我が帝國各方面の戰況は、瞬間に局面が一變した實狀は、戰鬪動作の悉く停止されたと言ふも、差支へ無い程である。

吁々、是れ偶然歟、必然歟、何の疑問を要せん哉、米本國に大地震が、突發した爲めである。

敵艦隊我海軍の猛追擊に盡く影を沒す

米潛航艇隊を、日本海に全滅せしめて、漸く愁眉を開いた、我が海軍々令部は、に火花の散る程に、各方面と無電の交換を開始して、猝かに活氣を呈して來た。

米海軍を背面より襲擊せんが爲め、大湊に於て、戰備を調へつゝあつた、我が第二艦隊は、軍令部よりの無電によつて、急遽出動せし、布哇島警備の艦隊と合し、急編成の

我が聯合艦隊は、全速力を以て本國指して逃走する、米艦隊を追蹤した。

敵もさる者、斯くあるべきを豫期して、濠州艦隊を殿軍と爲し、我が艦隊の追擊に備へんとしたのである。

既に戰運は回轉した、朝鮮水道に於て米潛航艇を全滅せしめた我が潛航艇隊は、更に勇を鼓して一氣に外洋に進出し、潛航艇最大限度の急速力を以て、直ちに、逃走する米艦隊の、追擊に移つたのである。

彼れは、敗殘の日本艦隊追擊し來らば、一擊の下に擊沈し呉れんと計り、威風堂々太平洋上の軟風に戰旗を飜へし、悠々平時の速力を以て、東を指して航進して居た、神ならぬ濠州艦隊は、側面より、我が精鋭なる潛航艇隊が、襲擊を加へ樣とは、想像だもしなかつた。

古い形容詞を以てせば、艨艟海を掩ふと言ふ程の、濠州艦隊は、八隻は拿捕され、三隻は半ば浸水して自由を失ひ、其他の大小艦艇四十餘隻は、盡く我が機敏なる潛航

艇の爲めに轟沈せられたのである。

大膽にも、我が潜航艇隊は、悉く洋上に露出浮揚を爲し、各艇の將卒は、甲板に出で丶、怒濤も收まる程の、萬歳を三唱した。

醜態を波間に浮べて、徒らに救ひの悲鳴を揚ぐ、敵艦隊の將卒を救ふの暇がない、太平洋の魚族に營養を與へよと計り、米艦隊を追擊する、我が聯合艦隊に合すべく、再び潜航に移つた。

布哇より西南二十六浬を隔つ、A水道にかゝつた米艦隊は、我が追迹艦隊の爲めに遂に前路を遮られた、只管ら先きをのみ急ぐ米艦隊は、隊形を戰鬪序列に轉換せず、縱隊航進の儘、無我夢中になつて、無照準の發砲を爲すのみである、復讐の念に燃える、我が艦隊は巨砲亂射を物ともせず、幾んど、舷々相摩せん計りに接近して、敵各艦上に一齊に速射砲を猛射した、我が海軍の艦載飛行機が、極めて大膽なる爆彈投下は、見事に敵の旗艦に命中して、忽ら猛火を發したる巨艦が、全艦火に包まれた儘、

全速力を以て疾走する狀は、凄慘極まれる壯觀である。

火の如き敵愾心を以て、阿修羅の如き勇を奮ふ我兵は、一人として決死の覺悟にあらぬものはない、各自本分を守りて、善戰を竭してゐる、敵艦一隻も餘すなとは、期せずして、我が全艦隊將卒を通じての、一致した强き信念である。

敵各艦は、我が艦隊の勇敢正確なる照準の爲め、艦上一物も餘さざる迄に射掃され艦體のみを以て、猶ほ逸走せんと焦る折柄、勝誇れる我が潜航艇隊は、戰鬪圈内に闖入して來た、さしも暴威を振ひし米艦隊も、火を失せし儘、戰線外に逸走せし、輕巡洋艦二隻を殘す他は皆な、我が潜航隊の最後の爆擊に、悶れや、太平洋上に影を沒して、波上には船體の破片と、救ひを求め乍ら、溺るゝ敵兵を浮べるのみ。

二時間餘に亘る、さしもの大激戰も、我が艦隊は、飛行機一機と、小型驅逐艦を喪ひしのみ、重傷者も出さずに、積日の怨恨を一氣に晴らし、砲聲よりも大なる歡呼を揚げて、海若を驚かし、各艦序列を正し、隊形を整へて、悠々、布哇の根據地にと引

揚げた。

× × × ×

大事變の爲めに、喪神困憊に陷れる、米國民は、敗報を聞き。
國家隆運に轉回せし、我が戰捷國民は、更に斯の一大快報に接せんとは。
唯、神威、可恐——、可恐——、神威。

❀

大本營は、更に第二の快報を發した。
正義の範を以て立てる、我が帝國は、支那の哀願的休戰申込を、直ちに容れたので
あつた。
其齎らせし應酬は何物ぞ、己に道義地を拂ひし、獸心の支那は、支那各地の米陸軍
が、二十九隻の輸送船に分乘して、急遽本國に歸還せんとする、其航路を安全にせん

とて、各船檣頭に、支那國旗を掲げしめんが爲めであつた。
支那國旗を掲げた、米國汽船が、舳艫相啣んで、渤海灣外に進出せし所を、天なる
哉、命なる哉、我が臺灣警備艦に發見され、我が艦は直ちに無電を以て、僚艦三隻を
參加せしめ、進行停止を命ぜし儘、水雷を發射して、兵員軍器滿載の敵輸送船二十九
隻を、一齊に擊沈して、支那海底の藻屑としたのである。
今や、我が國民は、上下を通じて、殆んど、發狂狀態を呈したと謂つたならば、讀
者は、其狂喜の狀を、想像することが出來るであらう。

神明赫怒人道の大敵を懲す

火山脈と稱する地熱が、地殼積層の間隙に、噴出流走して、其の迸出力に由る强弱
と、土壤岩層の硬軟に依り、迂餘屈曲して、皺襞を生ずるのである、それが地熱源の
移動により、熱氣と瓦斯との流動が止み、脈流空洞に化する、卽ち地層の生活變化の

自然現象として、其の空洞が、急激に充塡さるゝ地質移動より生ずる、表皮の震動が、便ち一般地震と稱する現象である。

❀

舊地形を以て之を示さばハドソン灣の中央部より、ミシガン湖に貫く、一線を劃しミシガン湖より發して、墨西哥灣に連なる、ミシシッピー河を劃線と爲し、卽ち米大陸を中央南北に劃し、太西洋に面せる大陸一半が、中央部に於て十七尺、太西洋岸に於て二十四尺、到底言語文章を以て、名狀すべからざる、大震動音と與に、陷沒したのである、激動の爲めに、凡ての大建築物は問ふ迄もなく、地上のあらゆる大小物體は、盡く粉碎された、其れも瞬間、滿々たる太西洋の海水が、堰き止めし閘門を、一時に破壞するが如き勢を以て、激浪奔流の襲ひ來た、其れも瞬間、建築物の倒壞粉碎の爲めに、壓死を免れし人畜は、海嘯激浪の爲めに、忽ち太西洋の底深く捲き込まれたのである。

世界文化の精華、都市の模範と誇りし、壯麗宏大なる紐育も、千歲に自由を矜る、女神の像も、將來世界統治の府を以て許せし、由緒深き、華府のホワイトハウスも、皆瞬間にして影を沒し、濁流怒濤逆捲く海洋と變じて了つた。

傳說のノアの洪水も、三日三夜を費し、ポンペイも猶ほ一夜を要したではないか、是れは又、北米中の重要なる、廣袤數十萬エーカー程の陸地が、瞬間にして、大洋に化したのである。

天理に反し、人道を亂す者の上に、下る神律は、斯くも峻烈嚴格なるものであらうか、斯も大威力を見聞して、猶ほ神を恐れず、神を敬はず、神に歸せざるもの有りとせば、是れは、地上の人類では無いのであらう。

詳報に接せし、世界各國民は、賢愚を問はず、咸く顏を掩ふて戰慄した。

斯くまで凄まじき、大陷沒の震動は、なんでふ殘存の陸地に於て、免るゝことが出

來樣ぞ、陷沒の斷層全線に亘つて、陸上十哩盡く大海嘯に洗ひ去られた、太平洋に面せる、西部一帶の陸地は、近い例を以て之れを示せば、前年我が東京に於ける地震に倍加せる强震に襲はれ、九ヶ州、都鄙の別なく、大建築物は倒壞され、男女の死傷は殆んど無數とも言ふべき、慘狀を示したのである、建築物其他の損害の多大なる割合に、火災の生じなかつたのは、將來の米國に取りて、幸歟、不幸歟。

如何に天譴を蒙れる、人道の敵國とは言ひ乍ら、世界各國が何等救濟の方策を講ぜざるは、刑罰が餘りに、苛酷に過ぎたる嫌はなからう歟。

外、列國は、極度の恐怖に、茫然自失し、內、國民は、絶大の神惠に、歡喜熱狂する時、限無き、博愛仁慈の上意は下つた。

▼日本國民は、戰前の友誼心を喚起して、速かに、全米被害民に對し、救濟の惠を洽(あまね)くせよ。▲

と、感激措く能はざるものは、惟り帝國臣民のみではなかつた。

政府は直ちに、彼の神命を帶べる團體と協議の上、五百億の責在支出を決定し、全國上下擧つて、米國被害民の、救濟準備に着手したのである。

支那の國論統治權を日本天皇に委せんとす

休戰成立の初頭に於て、陋策醜態を暴露せし支那は、日米兩軍の蹂躪を免れたる、四川の成都に於て、各省の督軍、或は代表者を召集し、日本對策大會議を開催した。

昔者、堯舜善政の範を、內外に垂れたる、聖人國。

今者、骨肉呑噬、私利を計るの外、眼中國家なき、貪婪國。

斯の國民は、果して如何なる國是を策立して、我が帝國に對せんとする歟。

世界の大勢は、業に己に轉回した、爰に端なくも、列國の視聽は、老大國の最後の態度に、集注したのである。

崇古癖と、繁文縟禮とを喜ぶ支那人も、國家の危殆を眼前に睹ては、各省代表等、何等論議を戰すもの無く、會〻一二愚論を吐ける者もあつたが、忽ちにして一蹴され一の卓絶せる統帥者が無ければ、何事にも、一定の歸向を失ふ、日頃の彼等に似氣なく、衆口一致、主唱者の提議せし、支那三分説も、參會員に一顧だもされず、議は竟に。

■支那全土を日本天皇の統治に委し、公選に係る、聯邦首相を建て、之れに委任統治權を受け、各省の地方長官任免權を與へられ、自治行政を以て、全國民の統一安定を計る事。

■從來支那が、獨立國として、各國と結びたる、互惠條約は、其存廢交渉を、日本政府に一任する事。

日本政府が此れを承認して、和議成らば、直ちに列國に、國際儀禮を竭すこと、爲し、駐日公使として、日本の國情に通曉せし、二名の在野政客は、正副使に選まれ儀禮を竭して、來朝したのである。

我が外相は、支那使節に對し。

▼貴國の機宜を得たる醒覺は、我が善隣の爲めに、欣幸とする所である、然れども我が帝國は、今や、戰勝國としてにあらずして、神命を奉じて、世界の平和を確保すべく、等しく列國に處すべき、大使命を帶べる者、貴國も亦、國家興亡の決すべき重大事なれば、須らく、愼重審議を遂ぐるの間、滯在して、心身を靜養せよ。◀と、命じた。

支那本國に於ては、大總統令を以て。

▼支那全國民中、今次の成都會議に於て、決したる條項に就き、異議あらん者は、自ら矛を執つて、日本國に對抗せよ、國家は之れに干與せず、一私事と做して、總統府は、刑罰を科することあるべし、服する者は、謹慎以て、誠意を致すべし。▲と、都鄙隈なく、檄したのであつた。

兵亂、政變、苛斂誅求とに、倦み疲れた支那國民は、一人として、何ぶで反對する者があらうぞ、彼等四億の民は、來るべき善政を豫想して、天日を拜して、歡喜したのである。

北米合衆國終に無條件降伏す

布哇沖の大海戰に、虎口を遁れた、米巡洋艦二隻が、機關を損せし儘、辛うじて桑港に辿り着いた時は、恰も各州知事、並に重なる政務官等が、被害民の救助も打ち棄てゝ、善後策を凝議すべく、桑港に集會せし所であつた。

日本の强烈なる、電流放射の爲めに、通信を攪亂され、戰局の推移を詳かに知るを得ざりし彼等は、巡洋艦長等の、誇大なる形容を加へた、報告說明を聽いて、彼等一同は、幾んど失神せん計り、腰を拔きたる上、發語神經の痲痺を來して、一語も發すること能はざりし者は、十數人に及んだ程である。

何事にまれ、世界一を以て誇りし、彼等の口より、一齊に、期せずして、無條件降伏——無條件降伏なる語は、叫ばれたのである。

斯る折柄、我が至尊の仁慈と、國民の任俠とに、感激の頂點に達したる彼れ、雷同性の米國氣質を代表せし、政客等が、日本帝國の統治の下に、屬邦たらんと決したのは、必然の結果と謂ふべきである。

猶太祕密結社解散して日東帝國に投ず

鄉土を逐はれて千年、禍福皆な神の試錬と、確く攝理を信ずる者は、彼れ等猶太民

族である、世界に流浪散在する、彼れ等民族の胸奥に、建設せし國家こそは、徒らに山河形を存するも、空しく亡びんとする、老衰國などに比すべくもない、陰然輩固な國家を有つて居た彼れ等は、常に人の往かざる險路を辿り、蔑まるれば却て近づき、打たるれば反つて親み、勞苦を意とせず、悅樂あるを知らず、利慾蓄財の爲めには、情義を解せざる者の如き彼れ等、信條の爲めには、私財を抛つて吝まず、身を棄つるを厭はず、斯くして築き上げたる、隱然たる潛勢力は、今や、世界の表裏に瀰蔓するに至つた、實に彼等の夢む、エルサレムの聖地に立ちて、世界に號令することは、近き將來に實現するものたることを、深く信じてゐたのである。

約言して語らば、歐米の政權も、富力も、思想も、學界も、藝術工業も、咸く彼等の手に由つて、今日の所謂る文化なるものを、形成したのである、是れのみならば、彼等は大に人文に、貢献せしものと言はねばならぬ、然るに、彼等の固持する信條こそ、世界人類に取りて、眞に慄るべきものであつた。

彼れは魔神の使徒にして、卽ち魔神の經綸を、地上に現實して、世界を魔界化すべく、鬼謀至らざる無きが爲めである。

著者は徒らに、幽冥界の帷幔を揭げて、神機を洩すことを許されざるを、深く遺憾とするものなるが、神界に於ける正邪戰は、魔軍大敗して、魔王降伏し、既に遷善に向ひつゝある秘事實、これ丈を恐る々々洩らして置く。

驚くべき、而も悅ぶべき實證は現はれた、彼れ等八個の、異なる秘密結社の、首領と幹部とは、己に巴里の秘密策源所に會合して、密かに壯嚴なる解散式を行ひ、且つ全同族に對して、秘密宣言を交附したのであつた。

其れは、次の如きものである。

▼眞の神は、我れ等の爲めに、日本帝國に顯現して、エルサレム以來の大奇蹟を示したでは無いか、我れ等の渴望せし聖地こそは、極東の一小島、夫の日の出づる國である、今や、神の國は實現せり。我れ等猶太民族は擧つて、神の御子、日本帝國

の天皇を擁護せよ。▲

と、嗟々、曲論阿世の世の學者等よ、之れをしも亦徒らに、思潮の變遷、大勢の推移とのみ言ふ歟、卿等は遂に永久に、神に見放されし儕(ごろから)とにても謂はねばなるまい。

❀

今日の第二次、倫敦會議の開催は、又しても老獪なる、英首相の奸策なりと、簡單なる語を以て、之れを片付けるには、餘りに大なる、有意義の會議である。

國際場裡に體面を保つ、二十七ヶ國の代表等は、果して何を審議爲しつゝある乎。

至尊還啓國運維新、殿下至仁の令旨を賜ふ

國運——維新——、戰捷日本の帝都は、至尊の還啓を奉迎し、國務樞要機關の復活を得て、狂喜せん計りの賑ひを呈するに至つた。

畏くも、攝政殿下は、代々木の神宮に行啓、神殿深く參入され、親しく、大神の神靈に咫尺し給ひて、奉告の式を竟へさせられ、斯くて、百官有司、朝野の名士、外國使臣等を、神苑(しんゑん)に會はせ給ひ、內外民衆の參觀をも許され、親しく臨御。

▼帝國は、武力に依るにあらずして、正邪を糺し、無道を懲し、皇威を中外に宣揚するを得たるは、一に神威神力の顯現に因り、而も絕大なる、冥護を垂れ給ひしに依る、萬國に臨むに、戰捷國なる誇りを以てせざることを深く懌ぶ、予は、萬機を統ぶるに、咸く神意を體し、神命に遵ひ、有司をして事に處せしむ、內外の境を除き天日の昭々として、遍く照らして涯り無きが如く、愛撫の德を一にせむことを期す、有司萬民、予が旨を體せよ。▲

と、玉音朗かに、宣らせ給ふた。

參列の諸員、參觀の萬衆、感激を極む、思はず、異口同音に。

▼天地窮(あめつちきは)み無(な)く、彌榮(いやさか)え坐(ま)せ。▲

と、祝詞を言上した、其響は、海潮の高鳴る如く、轟き渡つた。

帝國首相は、今旨を布衍して。

帝國が神命を荷ふて、世界を德化一統し、眞の平和樂園の實現を期し、萬民悅樂して敬神せしむべき、大使命を有する所以を釋明宣言して、之れを、各政府を設くる、世界五十有餘の、大小各國に通告したのである。

神人合一宇宙の大統一成就す

彼れ猶太民族の、急變せし思想運動に、風靡されし、歐洲列國は、已に斯くあらんことを期し、同盟各國は、日本政府に諮らずして、英國と、極めて寛大なる和を講じたのであつた、斯くして、第一次倫敦會議の開催とは爲つたのである。

帝國首相が、勅を奉じて、兩院議員、各有力團體代表者、全國一鄕一村の總代等を帝都に召集して、神命に依り、帝國憲法を廢止せんと協り、全員一人の異議者なく、

廢止を卽時議決した、世界政治史未曾有の斯る重大事を、日本國民は當然の歸結と信じ、新聞社は號外も發行せぬ迄に、日本は神化したのである。

二十七ヶ國の代表特使、猶太民族代表使者、全印度代表特使、米國正式降伏使等、雜然たる中にも、畏敬謹愼の樣を持して、肅然として來朝した、手廻しの善過きた、先登第一着の支那使節は、扨も永々待ち草臥れたことであつた。

❀

世界統一と云ふ、重大なる會議の終了が、纔かに、五回の協議を重ねた丈であつた簡單さには、通信材料の尠き爲め、徒らに、飽氣なく感じたのは、新聞記者のみではなかつた。

× × × ×

日本皇室は、世界の宗家、神統一系の天皇を、世界の大元首と仰ぎ、世界各國を、

聯邦制と定め、各天賦の風土人情の異るに隨つて、自治組織の細則を糺し、世界聯邦に於ける、各國の元首は、咸く神選に係ることゝ、神命が下つた。

軍事國防兵器の解除、陸海軍隊の解散等は各國、其の民情に照らし、國民生活に惡影響を來さゞる、手段を講ずることゝ協定が成つた。

世界各國、住民ある所、咸く男女成年を以て、神護團を組織すること、此團體こそは、常に國民の、敬神祭祀の事柄を輔導し、老幼病者の保護と、相互扶助、風敎向上の事業に任するものである。

各國使節は、會議の重任を畢へ、一旦歸國するに先ち、神の奇靈を具さに聞きたる彼等は、一齊に、夫の神屋の神莚に、參列を許されんことを願ひ出た。

神則は情實を容さぬ、近く更めて、各國元首悉く入朝して、世界の神域と奠まれる大神宮の神苑に於て、嚴肅壯大なる宣誓式と、大祓禊とを竟らざる前には、許すことは能はずと拒絶された、彼等の失望落膽は、視るも氣の毒の極みであつた。

× × × × ×

夜無き、天日赫々たる、光明世界には、邪神、妖魅の住む所なく、白晝、北極星は頭上に燦きて、永久の平和を囁いて居る。

❀

統一後の宇宙の偉觀、壯觀、地上に神の建設し給へる、人類生活の、眞善美を極めたる、高天原の光景とは、神示を須つて、更に後篇に詳述せん。讀者、請ふ之を諒せよ。（終）

跋

――に代へて讀者に望む

茲に空前の奇蹟を公開せり、私かに惟ふ、本書若し盡國に普及せば、微くとも思想界の反省を促し、及び民心を醒覺せしむる上に於て、何等かの効果を齎すならむと、希くは、神統を稟けたる民族――我が同胞諸君、御通覽の上は、御希望或は御高批を寄せ給はむことを、是れ徒に興樂の爲めにはあらず、其反響を求めて神に奏上し、旁〻後篇の編述に資する所あらしめむと欲すればなり。

九鬼盛隆謹識

大正十三年十一月三十日初版發行
大正十四年一月十日再版印刷
大正十四年一月十八日再版發行

不許複製

神示小說 宇宙の統一奥附
定價金貳圓也

著者兼發行人 東京市外上目黑五三八番地 九鬼盛隆

印刷人 東京市四谷區簞笥町二十番地 甲立柳太郎

發行所 東京市外上目黑五二八番地 本道宣布會
振替東京六四三〇四番

發賣所 東京堂、北隆館、東海堂
至誠堂、上田屋、

大刷新紙數增加破天荒の記事滿載
世界唯一絕對他の企及を許さざる文献

一月發行第二卷第一號より面目一新

月刊雜誌 本道

菊版五十頁以上
定價一部三拾錢
一年三圓六拾錢
郵税一部金一錢

▼本誌は、世間の凡ゆる雜誌類とは全然趣を異にせる、内外古今文献あつて以來、未曾有にして、絕對他の企及する能はざる、異彩ある雜誌である。其所以は、畏くも

▽天照大御神の御經綸に本く、惟神本道を宇内に宣布する神業の、根本基礎たる神人對話の道を以て、敬神尊皇を經とし、人類善導を緯とする、神詔靈告を載錄公開して、世界人類の平和と榮福とを圖る、即ち本道宣布會の機關誌である。

▼宣道欄に於ては、古來過てる神祇祭祀の道を正し、眞に神に奉仕する正道を敎へ、神の儼在神の威德を證し、神を敬信せざるべからざる所以、及び我が皇室は地上人類の中心にして、之を尊重し扶翼せざるべからざる所以を宣べ、人生の眞の意義、本務、死後の歸結、即ち出幽の祕事を闡明して、絕對の安心立命を得せしめやうとするものである。

▼百般の學藝は勿論、思想といはず、實業といはず、衞生といはず、宇宙萬有の疑義を神に質し、之れが解決を一般に公開するものである。

▼讀者に興娛を與ふる爲めに、古來文藝界に顯著なる、在冥名士の靈を招き、毎號小說、思想、詩歌、文章等を連載する、例令は人丸でも、貫之でも、親房でも、馬琴でも、近くは羯南でも、梼牛でも、漱石でも、紅葉でも、外國では、老子でも、孔子でも、李白でも、耐庵でも、バイロンでも、ダンテでも、セークスピアーでも、ユーゴーでも、トルストイでも、望みの儘に之を招けば、彼等は歡び犇き合ふて、憑現し各自其知能を揮つて講演することを希望する、乃ち之を筆錄して、毎號連載することを、神より許された、論より證據此小說の如く實行する。

▽其他靈學普及の爲めに、靈道靈術に關する神傳の祕を開き玄を發きて、世人を啓導し、濟生の資助として、食養法、療病法、保健法、修養法等を示し、靈界瑣談として現冥兩界を通じて、奇靈玄妙の事柄を輯錄する。

▼斯の如く、一々破天荒なる記事を毎號滿載し、科學に心醉せる社會を醒覺せしめ、眞の科學の大開發は靈導に據らがるべからざる所以を知らしめやうとするものである。

此文藝思想界の大驚異を何と觀る乎

奮起せよ文士志ある者は皆來り投ぜよ

本道の由來及神詔摘錄

壹部代金拾五錢　郵稅金貳錢

本書は、本會創立の當初に、『本道』と題して發行せし小冊子である、其內容は、本道宣布會の首唱者、九鬼本田兩人が、大正九年の冬、神勅を奉じて本會を創立し、以來大正十二年五月に至るまでの、經歷を詳述せしものである、故に本會の趣旨、由來、神の儼存、神の意義、神と人との關係、神憑とは如何なるものか、我が皇室は何故に地上の至尊なるか、皇國は何故に世界萬國に冠絕せるか、及び重要なる本道大神の神詔等を知らんと欲するには、是非先づ一讀しなければならぬ書である。

本道神拜要典

壹部代金貳拾錢　郵稅金貳錢

本典に載錄せる禊祓神法は、長くも、天兒屋根大神より御直授し賜りたる、古來不傳の大祕事である、今之を公開するに當り、何人にも具さに應用せしめんが爲め、詳細なる作法十二條を圖示して說明せるものである、元來人の現體は有形と無形を問はず、多少の穢を帶びざる者はない、然るに一般に此穢を淨めずして、神前に進み禮拜し祈願等を爲すが慣例であるが、これは甚だ不敬の至りである、仍て先づ之を匡正すべく御敎を垂れ賜ふたものが此神法である。

次に載せる大祝詞も同じく、此大神の御直授し賜はりたる、何人も常に神前に參詣し奏唱せざるべからざる、最も尊き祝詞である。

次に三の誓言、八條の敎典共に拜唱に便せん爲句讀を正しく附せり。

少比子大神御直示　氣吹流、魂凝祕法、傳授

此靈術は、畏くも神祕玄道の御司神、少比子大神、本田神傳人に憑らせ給ひ、九鬼神招人に直授されし所の、古來無二の神法である、其効驗の大要を擧ぐれば、之を修得し常に實行せば、身體を强健にし、頭腦を明晰にし、靈能を發揮し、膽力を養成し、疾患を驅除し人格を向上せしむる等、本道の諸靈術を修めんとする者は、必ず先づ之を修得しなければならぬ登龍門である、且つ此法を修せざれば、人格を神格に經上す、參入式の神法を受くる資格なき程の最も重要なる業である。

方今世間には種々の靈術祕法などゝ稱するものが澤山あり、互に誇張して相凌いで居るが、何れも古來傳はれる支那印度の遺傳法の燒直しにあらざれば、自ら根據なき法を編み出し、世人を瞞化するものが多いが此法一たび世に行はれなば、何れも旭日の前に衆星其影を潛むるが如くであらう。大神曾て諭し給ふ「世の小賢ら立て爲せし者共、下腹を丹田と名づけ、徒らに力を籠むる事のみを勤む、大非事である、其非事たる理由は、徒らに腹膜を肥厚せしむ、腸管の蠕動を阻止し、血管に逆流を生ぜしめ、心の臟に塞迫を起さしめ、遂に天壽を縮むるに止む」と、實に此一言にして現代の靈道方術なるものゝ根基を覆し盡されてある、我同胞は男女を問はず、之を修得せられんことを勸む。

◎天珍乃女大神御直示、淨身、鎭魂法、を詳細に講述せし傳書を附錄として添附す。

以上は從來本會の宣傳費を補はんが爲め金拾圓以上の献資者に限り敎授し來りしも今より後は本會の會員となり應分任意の献資者に廣く傳授することゝ爲せり。

東京市外上目黑五三八　本道宣布會修道部

九鬼復堂先生口述

易占神契

絶對非賣本
原稿罫紙八百五十枚以上
製本洋裝最美
頒讓料拾五圓

先生の易學に於けるや世既に定説あり、畏くも、斯道の祖神少比子大神より稱辭を賜はり、占道に於ける問答を許され其後續々微妙の法を授け賜はりし者、天下古今實に我九鬼先生一人あるのみ、吾等只驚嘆して言ふ所を知らざるなり、然れども先生は神授の修學未だ卒へさるを以て撰著に筆を染め給はず、然るに本會の神業開始後多くの來訪者通俗的易占の妙用を發揮すへき書を先生に求むの急なるものあり、先生一日二三の有志に笑つて之を諾されたるが遂た強請して已まざる熱情に動かされ、劇忙自ら採知の餘暇なきを以て常に仕侍する吾等門人三名をして日々茶談の間に一卦づつ口述を筆錄するを許されたり、豈悦ばしからずや吾等雀躍して日々編輯の業に從へり、此書は前年門人に授けられたる鬼谷易占講義錄及斷易精蘊は易占の原理より學修し各機關を討れ斷法を究めて後之を占に應用するを得、故に研究に年月を積まされは妙用を得難し、此書は然らす易の素養少しもなきも卦を得其卦名の下に占ふ部門に就き索むれは精密に的確に卦變日辰其他關因を綜合したる判斷を自由に得らるゝなり、天下復此の如き至寶至便の占書は絶對になき事を斷言す、殊に物價相場の占斷は易占中至難とする所、此書は特に神通の妙を發揮せり、價値を論すれば此書の如き一部數百金の傳授料を拂ふも猶廉なり、此書一たび世に出づれは必ず易占界の大革命を來さん、希望者は速に申込まるべし、部數限あり、躊躇せば悔を百歳に遺さん、製本出來次第通知す。

申込所　東京市外上目黒五三八　本道宣布會出版部

285
132

終